

Stephen Crane's Strategy of Irony in The Red Badge of Courage

Kotani Koji
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/1355917>

出版情報：英語英文学論叢. 40, pp.45-79, 1990-02. 九州大学英語英文学研究会
バージョン：
権利関係：

スティーヴン・クレイン『赤い武勲章』

—— アイロニーの戦略 ——

小 谷 耕 二

I

Stephen Crane がアイロニーを文学上の武器として効果的に用いた作家であることはよく知られている。彼の作品を読む場合、アイロニーを絶えず意識せざるを得ず、それが作品の意味を捉えようとする際に無視できない要素となっている。 *Maggie: A Girl of the Streets* において、「泥沼に咲いた花」¹ マギーは読者のシンパシーの対象でありながら、同時にその無知ゆえに軽い憫笑的ともなる。思春期の夢想とはいえ、なぜ彼女はどうひいき目に見てもろくでなしの Pete に夢中になり、彼を「騎士」² と崇めてしまうのか。“The Open Boat” では、どうして嵐の海に投げ出された小舟の中で、よりによって最も精力的に働いたオイル係 Billie だけが、岸に辿り着いたときに死んでしまうのか。また “The Blue Hotel” のスウェーデン人はついに一度も現実と幻想の距離を正確に測ることができずに殺されてしまうが、その死骸がみつめているレジスターの上には、「これがお支払い金額の合計です」³ という文句が書かれている。こうしたアイロニーの例は枚挙にいとまがない。*The Red Badge of Courage* の場合も事情は同じである。

『赤い武勲章』は比較的短い小説であるにもかかわらず、それを扱った論文が異例に数多いが、このことも基本的にはクレインのアイロニーの射程をどうとるかということに関係している。すなわち、作品の前半部でアイロニ

-
1. Stephen Crane, *Maggie: A Girl of the Streets* (A Norton Critical Edition; New York: W. W. Norton & Company, 1979), p. 16.
 2. *Ibid.*, p. 20.
 3. Stephen Crane, “The Blue Hotel,” in Joseph Katz ed., *The Portable Stephen Crane* (New York: Penguin Books, 1979), p. 446.

カルであったクレインのまなざしは、結末部までにはアイロニーを捨象されて、主人公 Henry Fleming の姿を肯定しているのか。それともクレインは最後まで一貫してヘンリーに皮肉な視線を投げかけているのか。あるいはクレインのまなざしとヘンリーのそれとは、あるときは重なりあって共振したり、またあるときは互いに反発しあったりしているのか。ひとつにはそこをどう捉えるかによって、例の議論百出の問題点——はたして結末部でのヘンリーは成長しているのか否かについての解釈は決定されてくるのである。

ところでクレインのアイロニーの射程を確定するのに、草稿の検証という立場からの興味深いアプローチが Henry Binder によって試みられている。⁴ここでビンダー説に依拠して『赤い武勲章』の出版事情を概観しておく、この作品は1893年に執筆され、まず1894年12月と翌年の7月に、55000語から18000語に縮約された形で、Bacheller Johnson シンジケートによって新聞紙上に掲載された。その後同年8月にニューヨークの雑誌 *Current Literature* に第4章からの抜粋が掲載された後、1895年10月に Appleton 社から一冊本として刊行された。現在 Virginia 大学図書館の Clifton Waller Barrett Library のスティーヴン・クレイン・コレクションにそのマニュスクリプトが残存しており、その裏ページには、クレインは用紙の節約のためにその両面を利用したらしく、もっと以前の段階の草稿 (draft) が書きこまれているということである。⁵

ビンダーはアップルトン版が刊行されるまでに、少くとも初期の草稿^{ドラフト}、次にマニュスクリプト、それから（これは現存してはいないそうであるが）タイプスクリプトもしくはグラ刷りの段階があったと想定し、その各段階を経る間にどのような修正がなされたかを検討している。ビンダーの考えでは、二度にわたって大きな改訂が行われており、まず第一回目の改訂では、マニユ

4. Henry Binder, "The Red Badge of Courage Nobody Knows," *Studies in the Novel* 10 (Spring 1978), 9-47.

5. このマニュスクリプトは完全なものではなく、そこから六葉が脱落している。ただそのうちの四葉は、Columbia 大学 Butler 図書館、Harvard 大学 Houghton 図書館及びニューヨーク公立図書館のバーク・コレクションに所蔵されている (Binder, p. 11)。ちなみに、初期の草稿とマニュスクリプトの最終稿が Fredson Bowers (ed.), *The Red Badge of Courage: A Facsimile Edition of the Manuscript* (Washington, D. C.: NCR/Microcard, 1972) に複写されているということであるが、筆者は未見である。

スクリプトから^{オリジナル}原案の12章全部と、第7章、10章、15章(アップルトン版の第14章)のそれぞれ末尾の部分が削除され、第二回目では、マニユスクリプトではそのまま削除も修正もされていないが、アップルトン版には載っていない部分、すなわち原案の第16章と25章(それぞれアップルトン版の第15章と最終章にあたる)の長短幾つかの paragraph がタイプスクリプトもしくはゲラ刷りから削除され、その他短い paragraph や文章、語句の細かな修正が施された。⁶

これらの削除部分を中心に、マニユスクリプトとアップルトン版とを比較考察して、ビンダーは次のような結論を得ている。すなわち、第一に、作品に本来存在していたアイロニーに混乱が生じている。第二に、ヘンリーの心理的複雑さが減少している。第三に、Wilson とぼろ服の男 (the tattered man) の機能が曖昧になっている。第四に、幾つかの箇所、特に最終章でテキスト自体に矛盾が生じている。こうしてビンダーは、アップルトン版『赤い武勲章』、特にその最終章に集約的に見られる曖昧さは、削除・修正を通して、本来そこに存在していたものがなくなったために生じてきたと考えているのである。

このように、作品解釈上の多様さもしくは混乱を、作品の多義的な豊饒なる曖昧さの結果とみるのではなく、テキスト自体の不完全さに還元する立場を Steven Mailloux も支持し、不完全なアップルトン版のテキストからどのようにして読者が様々な意味を読みとってきたかという問題を考察してい

6. まるごと削除されたマニユスクリプトの原案第12章、及びマニユスクリプトでは手加えられていないが出版時には削除されていた箇所は、Nortonの校訂版の第2版 (Sculley Bradley, Richmond Croom Beatty, E. Hudson Long, and Donald Pizer (eds.), *Stephen Crane: The Red Badge of Courage* (A Norton Critical Edition; New York: W. W. Norton & Company, 1976) 所収) では作品の末尾に附録として掲載されている。またヴァージニア大学の全集版 (Fredson Bowers (ed.), *The University of Virginia Edition of The Works of Stephen Crane*, Vol. II (Charlottesville: The Univ. Press of Virginia, 1975) は、削除された原案第12章の他に、初期の草稿を収めている。この他 R. W. Stallman (ed.), *The Red Badge of Courage and Selected Stories* (A Signet Classic; New York: The New American Library, Inc., 1960) でも削除及び修正箇所の概要を知ることができる。尚ビンダーはマニユスクリプトに依拠した校訂版を編集しており、それが Hershel Parker et als (eds.), *The Norton Anthology of American Literature* Vol. II (New York: W. W. Norton & Company, 1979) に再録されている。

る。⁷ 彼はこの作品に対する従来の批評を、(1) (成長の含意は論者によって様々であるが) ヘンリーは成長し、語り手(クレイン)のヘンリーに対する態度はアイロニックなものからシンパセティックなものへと変化するという立場、(2) ヘンリーは成長せず、語り手は常にアイロニカルであるという立場、そして(3) テクスト自体が矛盾しており、意味をなさないという立場に大別し、それぞれの解釈にどのようなコンヴェンションもしくは定型化した認識の様式にもとづいた慣例が作用しているかを分析している。たとえば、大多数の論者がヘンリー成長説をとっているのだが、マイユはその解釈が成立する背景に、19世紀の戦争小説というジャンルの存在を想定する。マイユによれば、19世紀前半までの戦争小説といえば歴史ロマンスであり、そこでは戦いは栄光を達成するための理想化された場であり、将官はすべて勇敢な英雄で、普通の兵卒たちも愛国の心情に燃え、上官の命にも喜んで従う。戦いに野蛮な場面が描かれるときは、それはきまって敵の残忍な所業、というのが相場であった。ところが南北戦争後、この慣例が変化し、リアリストティックな戦争小説が登場してくる。そこでは戦争が美化されることはなく、主人公も勇敢な英雄ではなくて、誤りを犯すことの多いアンチ・ヒーローとなっている。この変化が新たなプロットの定型を確立することになった。すなわち、主人公は作品の冒頭ではしばしば大見えを切って虚勢を張るのだが、実際の戦いの際には恐怖感にとらわれてしまう。しかしやがて恐怖を克服し勇敢な兵士に変貌してゆく。つまり戦いを通したイニシエーションというパターンが成立するのである。そしてクレインの同時代の書評家を含めほとんどの読者が、『赤い武勲章』を、その心理的リアリズムと印象主義的な文体は別として、リアリストティックな戦争小説の伝統に属する作品とみなし、したがってヘンリーもイニシエーションのパターンに合致して、成長する人物と解釈されるのだと、マイユは指摘している。

マイユ自身は、アップルトン版は一見リアリストティックな戦争小説というジャンルの定型に従っているように思えるが、マニュスクリプト版では、クレインは歴史ロマンスにみられる戦争の理想化を拒絶すると同時に、リアリストティックな戦争小説にみられるイニシエーションの成功をも拒絶してお

7. Steven Mailloux, "The Red Badge of Courage and Interpretive Conventions: Critical Response to a Maimed Text," *Studies in the Novel* 10 (Spring 1978), 48-63.

り、その点にクレインの独自の構想を看取できると考えている。⁸

ここまでビンダーとマイユの論考をかなり詳しく紹介してきたのは、マニュスクリプトに依拠したそのヘンリー観および作品のトーンについての解釈が、アップルトン版にもとづいた現行のテキストを読んだ限りでの私の印象とかなり近いからである。彼らはアップルトン版でのヘンリーは成長するように描かれていると考えているのだが、マニュスクリプトに拠らずとも私にはアップルトン版のヘンリーもやはり成長してはいないし、そこでのクレインのヘンリーに対する見方も常にアイロニカルであるように思える。⁹ビンダーがテキストの矛盾と考えたものも、少なくともある程度まではヘンリー像自体の孕む矛盾に、いわば性格造型の問題として解消できるように思う。以下、小論では『赤い武勲章』におけるクレインのアイロニーの射程を、作品の構造、イメージ、登場人物間の相互関係等と絡めて考察する。¹⁰

-
8. リアリスティックな戦争小説の典型とみなされる Tolstoy 作 *Sebastopol* (1854—55) の英訳は1887年に出版され、クレインはこの作品に深い感銘を受けている。Mailloux, p. 50.
 9. この基本的な立場は Howard C. Horsford のそれと軌を一にしている。““He was a Man””, *New Essays on The Red Badge of Courage* ed. Lee Clark Mitchell (New York: Cambridge U. P., 1986), p. 110 参照。尚、このホースフォード論文には作品解釈の方向づけを含めて、ヘンリー像への視点でも多くの示唆を得ている。
 10. マニュスクリプトに依拠したビンダー編集のテキストが刊行されるに及んで、この作品には、従来のアップルトン版にもとづいたテキストとビンダー編のものと二種類の基本的なテキストが存在することになった。どの程度までマニュスクリプトを利用してよいのか、削除・修正は誰の手になるものかなど解決されるべき困難な問題が存在しており、どちらを定本とすべきかについてはにはわかには判断し難く、本文批評の進展を俟たねばならない。改訂の経緯についてもたとえばヴァージニア大学全集版を編集したフレッドソン・パウアーズはビンダーとは異った見解を示している。そこで、小論では、基本的に従来のテキストを踏襲したノートン本文校訂版(1976年版)を使用し、『ノートン・アメリカ文学選集』第2巻所収のマニュスクリプト版は必要に応じて参照するにとどめるという方針を暫定的に採っておく。尚、訳文は基本的には西田実訳『赤い武功章』(岩波文庫、1980年版)を使用しているが、必要に応じて訳語を変更した箇所もある。

II

『赤い武勲章』の構成の主要な原理を成しているのは、重ね合わせ (doubling) と反復 (repetition) を絡めた対比の技法であるように思える。そしてこの原理は、作品の大きな枠組の次元、連続する各場面の相互関係の次元、登場人物の関係の次元、文学上のコンヴェンションとの関係の次元、及び作品外の文脈との関係の次元で作用し、そこにクレインのアイロニーの戦略が縦横にはりめぐらされている。

この作品は、戦闘場面のなまなましい描写もさることながら、戦争という極限状態での若い兵士の心の動きを克明に描きとったところにその価値と意義があると考えられている。戦いを前にした不安や恐怖、戦いの最中の我を忘れた状態、そして脱走、そのことに対する自己弁明、自分の過ちが見咎められはしないかという不安、猛然と戦い、その戦いぶりを認められた自分に対する満足等々、主人公ヘンリーの心理が解剖される。その心の動きは振幅が極めて激しく、絶望的に意気消沈したかと思うと、次の瞬間には過剰な自信を取り戻し、誇大な自己幻想にふけったりする。こうした心理の起伏が比較的短い間隔で繰り返され、その反復が連続する場面の相互関係のなかに対比を生み出していく。その際、対比の特質を形造るのは、後続の場面が先行の場面を打ち消すという、いわばネガティブな対比である。前の場面で描き出された感情や思考が、次の場面ではそれと明白な対照をなす感情や思考によって覆される。そしてそれが繰り返されることでアイロニカルな主調音が確立してくるのである。以下その点を作品に則して具体的にみておく。

ヘンリーは次々と伝えられる戦況を聞いて、「戦争熱と愛国心 (“War ardor and patriotism”)(p. 7) に駆られ、母親の現実的な忠告を無視して、兵役を志願する。

Later, he had gone down to his mother's room and had spoken thus: “Ma, I'm going to enlist.” (p. 8)

そして現代は、かつて夢想したようなホメロス風の勇壮な英雄たちの戦いの時代ではないという思いを抱きながらも、行軍の途中、人々の歓呼の声に気持ちが昂揚し、自分は英雄にちがいないと思ひこみ、華々しい武勲をうちたてる力が湧きあがってくるのを感じず。

... the youth had believed that he must be a hero he had felt growing within him the strength to do mighty deeds of arms. (p. 10)

しかし長い露営生活の間に英雄幻想は薄れ、逆にやがて訪れる戦いで逃げ出しはしまいかという不安と恐怖が生じてくる。英雄どころか、戦いにおいては自分は全く未知数の存在だということを知るのである。

It had suddenly appeared to him that perhaps in a battle he might run. He was forced to admit that as far as war was concerned he knew nothing of himself.

Whatever he had learned of himself was here of no avail. He was an unknown quantity. (p. 11)

戦争へ向けての行軍が始まると、不安と恐怖はいつそう高まり、いくらかお祭り気分の（ように見える）他の兵士たちのなかでひとり孤立感を抱いたヘンリーには敵軍が怪物のように感じられる。そしてはじめての銃声を耳にするに及んで、彼は自分の意志で志願してここに来たのではないと思うに至る。

But he instantly saw that it would be impossible for him to escape from the regiment. It inclosed him. And there were iron laws of tradition and law on four sides. He was in a moving box.

As he perceived this fact it occurred to him that he had never wished to come to the war. He had not enlisted of his free will. He had been dragged by the merciless government. And now they were taking him out to be slaughtered. (p. 21)

ヘンリーが政府の宣伝にのせられて、「戦争熱」に浮かされ、踊らされていたのだ、彼は心の底では戦争には来たくなかったのだ、とひとまず好意的に解釈することはできるにしても、これは先に引用した彼が母親に対して言った言葉とは明らかに矛盾している。

ところがその一方で、砲火の響きが轟くと、好奇心に駆られ、誰よりも早

く戦闘の場面を見ようと一目散に駆け出してゆくのはヘンリーなのである。

As they climbed the hill on the farther side artillery began to boom. Here the youth forgot many things as he felt a sudden impulse of curiosity. He scrambled up the bank with a speed that could not be exceeded by a bloodthirsty man. (pp. 21-22)

が、その好奇心もすぐに消え去り (“His curiosity was quite easily satisfied.” p. 22), 再び様々の思念に憑かれていく。ひどく怯えているヘンリーには、まわりの情景が不吉な様相を帯び、罠にはまったも同然の自分たちに、あたりに潜んだ敵軍が今にも襲いかかってきそうに感じられる。その危険に愚かな將軍連中は気づいていない。自分が、ただひとり状況を見通している自分が進み出て警告を発しなれば、味方は全滅だと彼は考える。

He was certain that in this vista there lurked fierce-eyed hosts. The swift thought came to him that the generals did not know what they were about. It was all a trap. Suddenly those close forests would bristle with rifle barrels. Ironlike brigades would appear in the rear. They were all going to be sacrificed. The generals were stupids. The enemy would presently swallow the whole command.

The generals were idiots to send them marching into a regular pen. There was but one pair of eyes in the corps. He would step forth and make a speech. Shrill and passionate words came to his lips. (p. 23)

戦いに関しては全く未知数であるはずのヘンリーが、ここでは將軍にも察知できぬ危険な状況を認識しているというわけである。

彼は今にも叫び出しそうになるが、そんなことをすれば皆から笑われるだけだと思って、すんでのところで思いとどまる。そして悲壮な面持ちで空を見上げるのである。

He assumed, then, the demeanor of one who knows that he is doomed to unwritten responsibilities. He lagged, with tragic glances at the sky. (p. 23)

この様子を見咎めて、中尉はヘンリーに隊列に戻るよう命ずる (“Come, young man, get up into ranks there. No skulking ’ll do here.” p. 23)。ここでのクレインの含意は明らかであろう。ヘンリー本人はひとりよがりの自己劇化を試みているが、はた目にははっきりと彼の無意識裡の合理化が露出している。彼は知らず知らずここで逃げ出そうとしているのであり、またその行為をあらかじめ正当化しようとしているのである。

ヘンリーはこうした不安と恐怖を解消する方途を、戦いの中でひとは往々にして変貌するという考えに求めもするが、やがて部隊が転々と移動を重ねるうちに、いつそのこと死んだ方がましだと考えるようになる。この苦悶から解放される安らぎの場所は死しかない。自分が理解される場所は死しかないと思う。

Once he thought he had concluded that it would be better to get killed directly and end his troubles. Regarding death thus out of the corner of his eye, he conceived it to be nothing but rest, and he was filled with a momentary astonishment that he should have made an extraordinary commotion over the mere matter of getting killed. He would die; he would go to some place where he would be understood. It was useless to expect appreciation of his profound and fine senses from such men as the lieutenant. He must look to the grave for comprehension. (p. 25)

ところが再び砲撃の轟音に、その考えはすっかりふきとんでしまい、彼は戦いの光景に見入ってしまうのである (“The youth, forgetting his neat plan of getting killed, gazed spellbound.” p. 26)。

第3章までヘンリーの心の動きをおおまかに辿ってみると以上のようなろう。これはあくまでも心理の大きなうねりと考えてよく、この間にもっと微細な時々刻々の変化もみられる。はじめての戦闘を直前に控えた未熟な若者だということを考慮に入れても、その場その場で変化してゆくヘンリーの

感情や思考は揺れが大きく、場あたりので矛盾だらけである。彼の心理がある核とでもいうべきものに収斂していった、そこから彼の人物像が明確な形をとるといったところはみられない。¹¹感情や思考が次の瞬間の感情や思考に絶えず突き崩されていき、刻々と変化するために、固定した像を結ばないのである。むしろそうした一貫性の欠如がヘンリー像の特質となっている。

ネガティブな対比の手法は刻々と変化するヘンリーの心理のひとつひとつの相互関係の中にもみられるだけではなく、同時にもっと大きな作品構成の枠組にもあてはまる。Lee Clark Mitchell の言葉を借りれば、『赤い武勲章』には「二重構造」(“dual structure”)が存在しており、ほとんどすべてが正確に反復される。二十四章仕立ての構成のうち、前半十二章はヘンリーの臆病さを扱い、後半十二章はヒロイズムが前面に出てくる。また二日間の戦闘においては、一日目には敵軍が二回攻撃をしかけ、二度目の攻撃を受けた際にヘンリーは逃亡する。逆に二日目は味方の側が二度攻撃を試み、二度目の戦いで敵軍が敗走する。こうした構成は、ヘンリーの変貌・成長という解釈の可能性を当然強く暗示するけれども、同時に、同じ状況で異なる結果が出てきているにもかかわらず、何ら本質的变化は生じていないのだというアイロニカルな読みを否定しざるものではない。¹²むしろクレインの対比がネガティブな特質をもつものだと考えれば、逆にその点が強調されているとみることもできよう。

この作品で扱われた戦いは南北戦争の際の現実にあった戦いを素材としたものだと考えられている。¹³その Chancellorsville の戦いは、2万7千人の死者が出たにもかかわらず、その結果たるやほとんど何らの影響をも戦局全体に及ぼすことはなく、二日間の戦いのあと両軍とも戦いの前とほとんど同じ地点に戻るようになったという。この現実の出来事という文脈の中に作品

-
11. この点に関しホースフォードは次のように述べている。“In Crane’s representation, Flemming is not so much a conventionally developed character, with a stable and distinct central being, as a welter of conflicting subjective sensations — an aspect that Conrad first called Crane’s “impressionism.”” (Horsford, p. 114)
 12. Mitchell, “Introduction,” *New Essays on the Red Badge of Courage*, pp. 17–18.
 13. Harold R. Hungerford, ““That Was at Chancellorsville”: The Factual Framework of *The Red Badge of Courage*,” *Stephen Crane: The Red Badge of Courage* (A Norton Critical Edition), pp. 157–167.

を置いてみるならば、クレインがそれを意識したかどうかはともかく、結果的にはその素材の選択は極めて意義深いものだったといえよう。仮にヘンリーが何らかの意味で成長したと考えてみても、その成長自体が素材となった戦いの無益さに無意味化されてしまうからである。このように作品外の文脈との関連という次元でも、ネガティブな対比のアイロニカルな意味作用は機能しているのである。

III

すでに見たように、冒頭の三章だけからでも作品の基調音にアイロニーの響きをはっきり聴きとることができるが、ここではそのトーンを支える幾つかの論点を指摘しておく。

まず第一にヘンリーの自己認識の欠如について。最初の銃撃戦でヘンリーは思いもよらず猛然と戦う。自らふり返って、自己満足で有頂点になるほどの戦いぶりであり (“He went into an ecstasy of self-satisfaction.” p. 34), 「今までは及びもつかぬと考えていたような理想の境地に、自分が近づいているときえ想像した」 (“He saw himself even with those ideals which he had considered as far beyond him.” p. 34)。しかしこれは不安・恐怖が昂じて盲滅法に銃を撃ったのであって、決して冷静沈着な状況判断にもとづいた行為ではない。そこでしばらくして敵軍が再度攻撃してくると、彼は一も二もなく逃げ出してしまう。つい今しがた自分を過大評価したのに対して (“He perceived that the man who had fought thus was magnificent. He felt that he was a fine fellow.” p. 34), 今度は敵軍の勢力を過大評価し、その幻影に圧倒されてしまうのである。¹⁴ ここにも彼特有の場あたりの心理の激しい振幅が端的にあらわれているが、その根本にあるのは認識力の欠如であるといえよう。その場その場の衝動的な感情、理性的判断を伴わず思考に振り回されて、ヘンリーのまなごしは心理のプリズムごしに歪んで誇張された像を結ぶのである。

ところがそのことに対する自覚はヘンリーにはなく、それどころか、逃亡を正当化しようとする試みる際に、その根拠としてよりによって自らの「すぐ

14. ヘンリーの眼には敵軍が “machines of steel,” “imps,” “redoubtable dragons,” “the red and green monster” (pp. 36–37) のように見える。

れた知覚や知識] (“superior perceptions and knowledge” p. 40) をあげる始末である。正確な状況判断を下した自分に比べれば、他の兵士たちや將軍連中の方が馬鹿者にみえてくる。そのことだけでもクレインのアイロニカルなまなざしの存在を感じとることができるが、ヘンリーの認識力の欠如を表現するクレインの手法はもっと精妙である。逃走の途中、ヘンリーは砲撃を行っている自軍の砲兵たちの姿をみかける。

He experienced a thrill of amazement when he came within a view of a battery in action. The men there seemed to be in conventional moods, altogether unaware of the impending annihilation. The battery was disputing with a distant antagonist and the gunners were wrapped in admiration of their shooting. They were continually bending in coaxing postures over the guns. They seemed to be patting them on the back and encouraging them with words. The guns, stolid and undaunted, spoke with dogged valor.

The precise gunners were coolly enthusiastic. They lifted their eyes every chance to the smoke-wreathed hillock from whence the hostile battery addressed them. The youth pitied them as he ran. Methodical idiots! Machine-like fools! The refined joy of planting shells in the midst of the other battery's formation would appear a little thing when the infantry came swooping out of the woods. (p. 37)

「その射撃ぶりを夢中になって賛美して」いる砲兵たちの様子は、ヘンリー自身の先ほどの自己満足 (“an ecstasy of self-satisfaction”) を思い起こさせるばかりか、大砲に示された「不屈の勇氣」 (“undaunted”, “valor”) も本来ヘンリーが求めているものをあらわす言葉である。つまり、戦いのなかでヘンリー自身がそうありたいと願い、夢想していた姿を表現する言葉がここでは用いられており、それに対して彼は愚かなものだという憐みを感じているのである。無論彼自身はそれを自覚してはいないが、ヘンリーは自らの理想を知らず知らず突き崩しているのである。少くともそう読める言葉をクレインはここで使用しているのであって、そうすることでヘンリーの矛盾と自己認識の欠如を巧みに暴露しているとみてよいだろう。

ついでながら、クレインのアイロニーの射程はそこにとどまらぬこともまた忘れてはならないだろう。砲兵たちに対してヘンリーが抱いた感情はある意味で正当なものであり、アイロニーは砲兵にまで及んでいる。なぜなら彼が考えた通り、敵軍の歩兵が間近に攻めこんでくると、砲撃の喜びなど消しとんで、砲兵たちは退却するからである。しかしこのことは決してヘンリーの認識力をも正当化するものではなく、彼が逃げ出した戦いは結局は自軍の勝利に終わる。つまりヘンリーの「すぐれた知覚と知識」は完全に覆されるのである。このように反転に反転が続き、アイロニーが反響しあう場所では、倫理は解体され、アイロニーが自己運動を行っているという印象すら受ける。クレインがヘンリーを見つめているその視線にはあまり倫理的なものはないのではなかろうか。

そうした視点からみると、従来クレインの人間観のなかでポジティブな意義をもつものとして評価されてきた友愛や連帯という観念も決して一筋縄では行かないものであるように思えてくる。¹⁵ 友愛や連帯という観念が強く表明されているのは「オープン・ボート」であるが、¹⁶ これとても作品全体の文脈に置いてみれば、必ずしも賞賛一辺倒というのでもない。それは自然の強大な力に押し潰されていくちっぽけな人間のせめてもの意地というところで

15. 友愛と連帯の肯定的評価に関しては、たとえば Edwin H. Cady は「オープン・ボート」のピリーが「人間の連帯、友愛、真に同情する能力、存在一般に対する無私な愛情」を生み出すのに大きな役割を果たしていると指摘し、それが自然主義的な状況を克服する可能性を秘めていることを暗示している (Edwin H. Cady, *Stephen Crane* (Revised Edition; Boston: Twayne Publishers, 1980), pp. 153—154)。また Donald Pizer はヘンリーの「赤い武勲章」は、彼がそれを獲得したいきさつにはアイロニックな事情があるにもかかわらず、「友愛の象徴」となっていると述べたあと、このように続けている。“Crane believed that this feeling of trust and mutual confidence among men is essential, and it is one of the few values he confirms again and again in his fiction. It is this quality which knits together the four men in the open boat and lends them moral strength. And it is the absence of this quality and its replacement by fear and distrust which characterizes the world of “The Blue Hotel” and causes the tragic denouement in the story.” Donald Pizer, *Realism and Naturalism in Nineteenth-Century American Literature* (Revised Edition; Carbondale: Southern Illinois U. P., 1984), pp. 26—27.
16. 「オープン・ボート」第3章の冒頭に次のような一節がある。“It would be difficult to describe the subtle brotherhood of men that was here established on the seas’ . . . , and they were friends — friends in a more curiously iron-

あって、その一方に「アリどもの苦難に背を向けた巨人」(“a giant, standing with its back to the plight of the ants”) ¹⁷ のごとき風車に象徴される、無関心な自然への苛烈な意識が存在している。あくまでも人間存在の卑小さという自然主義的な大前提にたつたうえでの友愛であり、連帯であろう。また *George's Mother* においては、友愛の実態は主人公 George Kelcey が飲んだくれの仲間たちに対して一方的に抱く幻想であり、結局は彼はそこからはじき出される。¹⁸ そこでは友愛や連帯という観念・言葉の美しさとその内実との落差は蔽うべくもない。

『赤い武勲章』においても、友愛と連帯はヘンリーの逃亡の自己正当化によって突き崩されている。最初の銃撃戦で彼は忘我状態に陥り、戦友たちとの一体感を抱く。

He suddenly lost concern for himself, and forgot to look at a menacing fate. He became not a man but a member. He felt that something of which he was a part—a regiment, an army, a cause, or a country—was in a crisis. He was welded into a common personality which was dominated by a single desire. For some moments he could not flee no more than a little finger can commit a revolution from a hand. (p. 30)

There was a consciousness always of the presence of his comrades about him. He felt the subtle battle brotherhood more

bound degree than may be common. . . . It was more than a mere recognition of what was best for the common safety. There was surely in it a quality that was personal and heartfelt. And after this devotion to the commander of the boat, there was this comradeship, that the correspondent, for instance, who had been taught to be cynical of men, knew even at the time was the best experience of his life.” Stephen Crane, “The Open Boat,” in *The Portable Stephen Crane*, pp. 365–366.

17. Crane, “The Open Boat,” p. 381.

18. “a brotherly feeling for the others”とか“fraternize,” “a chorus of violent sympathy,” “brotherly sentiments,” “brotherly regard for those about him”といった言葉が作品中に散見する。Stephen Crane, *George's Mother* in *The Portable Stephen Crane*, pp. 100, 101, 103, 116などを参照。

potent even than the cause for which they were fighting. It was a mysterious fraternity born of the smoke and danger of death. (p. 31)

ところが、「暗い所にも遠くが見える眼力の持ち主」(“the enlightened man who looks afar in the dark” p. 40)である自分が、「すぐれた知覚と知識」にもとづく判断から逃げ出したのに、結局は味方が勝利をおさめたことを知って、ヘンリーは不当な仕打ちを受けたように感じ、仲間に対して大きな怒りを抱く。そして「鉄のような不公平に踏みつけにされ」(“He was trodden beneath the feet of an iron injustice.” p. 40)、憎むべき環境に裏をかかれてしまった自分自身を憐み出すのであるが、その眼にはたいした罪を犯していないのに、不当に大きな罰を受けていると思っている罪人のような表情が浮かんでいる(“his eyes had the expression of those of a criminal who thinks his guilt little and his punishment great” p. 40)。彼の自己正当化の論理はこうである。

He had fled, he told himself, because annihilation approached. He had done a good part in saving himself, who was a little piece of the army. He had considered the time, he said, to be one in which it was the duty of every little piece to rescue itself if possible. Later the officers could fit the little pieces together again, and make a battle front. If none of the little pieces were wise enough to save themselves from the flurry of death at such a time, why, then, where would be the army? It was all plain that he had proceeded according to very correct and commendable rules. His actions had been sagacious things. They had been full of strategy. They were the work of a master's legs. (p. 39)

これは先に引用した「戦場の友愛」の一節とネガティブな対比をなしており、友愛や連帯の観念を破壊している。それと同時に、ここに表明された論理がいくらもっともらしくみえようとも、今度は逆に友愛や連帯の観念の側からこの正当化自体が突き崩されるのである。そしてこのような相互破壊的な関係のなかでは友愛や連帯に付随する倫理的色彩は脱色され、後に残るのはア

イロニーの自己運動とでもよぶべきものに思える。

二日目の攻撃においても、クレインは戦闘の熱狂のなかで個が全体の中に溶失する没我状態を再度描き出している。

But there was a frenzy made from this furious rush. The men, pitching forward insanely, had burst into cheerings, moblike and barbaric, but tuned in strange keys that can arouse the dullard and the stoic. It made a mad enthusiasm that, it seemed, would be incapable of checking itself before granite and brass. There was the delirium that encounters despair and death, and is heedless and blind to the odds. It is a temporary but sublime absence of selfishness. And because it was of this order was the reason, perhaps, why the youth wondered, afterward, what reasons he could have had for being there. (p. 87)

... it seemed that the mob of blue men hurling themselves on the dangerous group of rifles were again grown suddenly wild with an enthusiasm of unselfishness. From the many firings starting toward them, it looked as if they would merely succeed in making a great sprinkling of corpses on the grass between their former position and the fence. But they were in a state of frenzy, perhaps because of forgotten vanities, and it made an exhibition of sublime recklessness. There was no obvious questioning, nor figurings, nor diagrams. There was, apparently, no considered loopholes. It appeared that the swift wings of their desires would have shattered against the iron gates of the impossible. (p. 103)

これらの描写にみられる昂揚したトーンは、クレイン自身の中に友愛や連帯、もしくはその基盤にある個と全体の融合に対する潜在的な思い入れがあることを示しているとみてよいだろう。この作品自体が、実際の戦闘体験のないクレインの想像力の産物であるだけに、それだけ余計に彼自身の願望が反映するということは十分に考えられる。しかし同時にクレインにはすべてを覆さずにはおかないといった根強い精神の志向も存在していると思える。そこ

で友愛や連帯という観念が——それのもつポジティブな価値をクレインはよく理解し、かつそれを希求しているのだが——ヘンリーという人物の思考と感情の文脈に組み込まれる際に、微妙な不協和音が生じてくるのである。言い換えれば、友愛や連帯に対するクレインの思い入れとヘンリーの造型との微妙な落差が存在しているのだ。そしてその齟齬の背景には、片方で構築しながら、片方で破壊するというクレインの精神の動きがあり、それがアイロニーの原動力となっているのではないかと思える。

IV

認識力が欠如しているために、ヘンリーが自らの行為を弁護する正当化の論理には必然的に自己欺瞞的性格が伴うこととなり、これがまた作品のアイロニカルなトーンを支える要因となっている。そのことが端的にあらわれるのが、逃走後の森の彷徨の際にリスによって自然の啓示を得るというエピソードと、木々の枝々が交差して礼拝堂のようになっている場所で兵士の屍体に遭遇するというエピソードである。

ヘンリーのまなざしとその時々の内面状態に左右されて、著しく歪んだ像を結ぶことはすでに述べた。このリスの場面に至るまでも彼の眼にうつる自然の姿は変化している。森に逃げこんだ当初は、逃走後のうしろめたさと不安・恐怖を反映して、自然が敵対しているように感じられる。つる草は激しい叫び声をあげ、若木はシュッシュツと音をたてて彼の居場所を知らせようとする。彼は抗議の声を発する森をなだめることができない。

He was obliged to force his way with much noise. The creepers, catching against his legs, cried out harshly as their sprays were torn from the barks of trees. The swishing saplings tried to make known his presence to the world. He could not conciliate the forest. As he made his way, it was always calling out protestations. When he separated embraces of trees and vines the disturbed foliage waved their arms and turned their face leaves toward him. He dreaded lest these noisy motions and cries should bring men to look at him. (p. 40)

ところが、戦場を遠く離れ、「死の轟き」(“the rumble of death” p. 40) が聞こえなくなると、自然は傷ついた者を慰め、いやしてくれるような生命力を湛えたものに思えてくる。

This landscape gave him assurance. A fair field holding life. It was the religion of peace. It would die if its timid eyes were compelled to see blood. He conceived Nature to be a woman with a deep aversion to tragedy. (pp. 40-41)

このあとにリスの場面が続くのだが、そもそもなぜヘンリーがリスに松かさを投げるのかは判然としない。優しい自然のなかで一時的に不安と恐怖から解放され陽気な気分になったからだとしか考えようがないが、むしろここはヘンリーの行為の自然な動機を求めるよりもクレインの作為の方が表面に出てきていると考えるべきだろう。クレインはヘンリーに自然からの啓示を得させるために、そして後続の場面でその啓示の虚妄性を暴露するために、松かさを投げさせたのだとみてよい。彼は逃げ出したリスに自分の姿を重ねあわせながら、自己正当化の論理を導き出す。

The youth felt triumphant at this exhibition. There was the law, he said. Nature had given him a sign. The squirrel, immediately recognizing danger, had taken to his legs without ado. He did not stand stolidly baring his furry belly to the missile, and die with an upward glance at the sympathetic heavens. On the contrary, he had fled as fast as his legs could carry him; and he was but an ordinary squirrel, too—doubtless no philosopher of his race. The youth wended, feeling that Nature was of his mind. She reenforced his argument with proofs that lived where the sun shone. (p. 41)

危険が迫ったときに逃げ出すのは自然の理にかなった行為だというこの正当化が、一兵士の言い分として手前勝手なものであるばかりか、自己欺瞞的なものであることは、これに続く場面で小さな動物が水中に飛びこんで魚をくわえて出てくるのを目撃していながら、ヘンリーがそれには何の意味付けを行なおうとしないことから明らかである。意識的にか無意識的にか、彼は

自然の弱肉強食の一面を黙殺している。

しかし自然に対するヘンリーの自己欺瞞的幻想は森の礼拝堂のような場所での兵士の屍体との遭遇によって粉々に打ち砕かれる。「平和の宗教」と思えた自然の礼拝堂に鎮座しているのが、ヘンリーがそこから眼をそむけようとしてきた死そのものを象徴するような兵士の屍体なのである。

The corpse was dressed in a uniform that once had been blue, but was now faded to a melancholy shade of green. The eyes, staring at the youth, had changed to the dull hue to be seen on the side of a dead fish. The mouth was open. Its red had changed to an appalling yellow. Over the gray skin of the face ran little ants. One was trundling some sort of a bundle along the upper lip. (p. 41)

顔に蟻が群がっている屍体という、この世紀末風の鮮烈なイメージは、自然による救済の幻想の虚妄性を鮮やかに浮かびあがらせ、ヘンリーの自己正当化の試みを一気に瓦解させている。

このように森の中でのこの二つのエピソードは、その相互のネガティブな関係から、その含意は明らかであるが、ビンダー編のテキストにもとづいた『ノートン選集』版では、この兵士の屍体との遭遇に続く、削除された場面が復原されている。そこでは上に述べた解釈を支持する言葉がはっきり表明されているので、ここにその一部を引用しておく。

Again the youth was in despair. Nature no longer consoled with him. There was nothing, then, after all, in that demonstration she gave—the frightened squirrel fleeing aloft from the missile.

He thought as he remembered the small animal capturing the fish and the greedy ants feeding upon the flesh of the dead soldier, that there was given another law which far-over-topped it—all life existing upon death, eating ravenously, stuffing itself with the hopes of the dead. (p. 838)

この森の中での出来事を契機にヘンリーは再び戦場へと戻っていく。ただ

それがここで得られた認識 —— 生が死の上に成り立っているという、自然のもうひとつの原則の認識 —— にもとづいた行為であるかどうかには疑問の余地がある。兵士の屍体との遭遇の場面にみられる宗教的なイメージや、森の奥深く入って行くということが暗示する母胎回帰のイメージを念頭に置けば、この場面を軸にヘンリーが一種の回心ないしは再生を遂げ、変貌するというふうに物語が展開するのが、イニシエーションのパターンとしては自然であろう。自己欺瞞的幻想を打ち砕かれたヘンリーに正確な自己認識が訪れると想像するのが、イニシエーションのコンヴェンションに飼い馴らされた読者の常套的反応というものであろう。ところが必ずしもヘンリーは正確な自己認識を獲得しているともみえず、またこの森の中での出来事が、後のヘンリーの姿に何らかの明確な波及効果を及ぼした形跡はあまり認められないように思えるのである。むしろクレインは、連続する場面のネガティブな対比を通してヘンリーの幻想を突き崩し、そうすることでヘンリー像そのものを矮小化しているだけではなく、ジャンルのコンヴェンションを逆手にとり、物語展開の定石を覆すことによって読者にも一種の肩すかしをくわせてもいると考えられる。この“ironic deflation”¹⁹をクレインが隅々まで明確に意識して実践していたのかどうか断言するのは極めて困難である。クレインの才能の資質の問題がそこには絡んでくるのであり、作家の本能がそうさせたと考える余地は十分にあるからである。が、何はともあれ、その効果は明白であって、読者はヘンリー像に対していやがうえにもアイロニカルな距離をとらざるを得なくなってしまうのである。

V

この作品がイニシエーションの物語として構想されているならば、Jim Conklinの死もまた多大な教育的効果をヘンリーに及ぼしているはずである。主人公の開眼にコンクリンの死のエピソードは恰好の材料であり、いやしくもその種の物語を構想する作家がそれを見逃す手はない。しかしクレインはここでも物語展開の定型パターンを、表面的にはその定石を借りながら、実質的には突き崩しているとみることができ。片方で読者の予測を誘発する装置を考案しておきながら、片方でその予測を出し抜くという手口を、意識

19. これはパイザーの卓抜な用語を拝借したものである。Pizer, p. 25.

的にか否か、クレインは用いているのである。まるで眼に見えぬ何ものかを凝視し続けているジム・コンクリンの最期を描写するクレインの筆致にはなまなましいリアリティがあり、森の中の兵士の屍体の描写にもまして、凄絶ですらある。したがってそれを目撃したヘンリーにはどれだけ深く死の意味が心の中に食いこむことだろうかという思いを読者は当然抱くのであるが、予想に反してヘンリーがコンクリンの死に深い影響を受けたという様子はあまりみられない。なるほど彼は幼なじみの戦友の死を目撃した直後、空を見上げて「くそっ」(“Hell” p. 50) と一言万感の思いのこもった言葉を吐き捨てるように発する。この一言のあとに続く沈黙はそれなりに重い意味を孕んでいるといえる。²⁰ ところがその後のヘンリーの姿はその死の重さを十分に受けとめているとは言い難いのである。²¹

ジム・コンクリンの死がヘンリーに対してどのような意味をもっているのか、イニシエーションの物語の枠組で正面から捉えることができないとすれば、解釈の視点を少しずらしてみる必要があるだろう。この作品におけるクレインの基本的な手法が対比を用いることであることはすでに述べたが、ここでもその原理が作用しており、コンクリンの死のエピソードは、それに続く場面でヘンリーがぼろ服の兵士を見捨てるエピソードと対比されているのではないかと思う。ぼろ服の兵士を性格造型という観点からコンクリンと比較することは不可能であるし、その必要もないが、彼は少なくともコンクリンと同様死の間際にあるという点で共通項をもつ人物となっている。²² そしてその挙動がコンクリンに似通ってきているのである。

20. したがって、たとえば Stallman のようにこの場面の意義を過大とも思えるほどに評価して、それを極めて宗教的なイメージに引き寄せて解釈するのも無理からぬことではある。ちなみにストールマンは、ジム・コンクリンをキリスト的人物とみなし、——というのもその名前のイニシャルが J・C であり、彼が脇腹を負傷しており、更にその死を媒介にしてヘンリーが再生するからというわけである——その章の最後の文章の “wafer” (p. 50) を、カトリック教の儀式に用いられる聖餅と解釈し、様々の議論を招いた。Robert W. Stallman, “The Red Badge of Courage,” *The Houses That James Built and Other Literary Studies* (Athens: Ohio U. P., 1961), pp. 94–95.

21. その後ヘンリーがジム・コンクリンの死に言及するのはただの一回しかない。

22. ぼろ服の兵士が躰の調子がよくないと言ったのを聞いて、ヘンリーは驚いてこう考えている——“He wondered if he was to be the tortured witness of another grim encounter.” (p. 51)。ここでもぼろ服の兵士とジム・コンクリンとは関連づけられている。

The youth looking at him, could see that he [i.e. the tattered soldier], too, like that other one [i.e. Jim Conklin], was beginning to act dumb and animal-like. (pp. 52-53)

つまりここでクレインは、ヘンリーにコンクリンの凄まじい死を目撃させたあと、もう一度今度はぼろ服の男を通して、同じような死をヘンリーに目撃させようとしている。そしてヘンリーはそれを避けて、今にも死なんばかりのぼろ服の兵士を見捨てる。イニシエーションの物語であれば主人公の成長の契機となるべきジム・コンクリンの死が、逆にぼろ服の兵士を見捨てるというヘンリーの行為を浮きたたせ、成長の不在もしくは欠如を暴露する結果となっている。このように物語の定型的パターンを覆したり、あるいは枠組だけを借りてきて実質を空洞化するという手法がアイロニーを発生させることになっている。

このアイロニーはぼろ服の兵士が自分のことよりも、傷ついた（実際はこの時点では負傷していない）ヘンリーのことの方を心配する人物であることによっていっそう強められる。「どこを負傷したんだ」(“where is it located?” p. 52) とたずねるその言葉が、逆にヘンリーの胸に突き刺さり、逃亡の恥辱感を増幅する。

The simple questions of the tattered man had been knife thrusts to him. They asserted a society that probes pitilessly at secrets until all is apparent. His late companion's chance persistency made him feel that he could not keep his crime concealed in his bosom. (p. 53)

戦闘を前にして逃げ出しはしないかという不安や恐怖ではなくて、今度は逃げ出したことが仲間知れ渡ってしまいはしないかという不安がヘンリーの関心事となる。そうした不安の対象の変化はあるが、ヘンリーが本質的に変化しているとはいえない。置き去りにしたぼろ服の兵士を遠くから振り返って、ヘンリーは死んでしまいたいと思うが(“He now thought that he wished he was dead. He believed that he envied those men whose bodies lay strewn over the grass of the fields and on the fallen leaves of the forest.” p. 53), 退却する味方の兵士たちを見ると、自分が逃げ出し

たのは間違っていなかったのだと感じて慰められる (“The youth felt comforted in a measure by this sight. They were all retreating. Perhaps, then, he was not so bad after all.” p. 54)。そうかと思うと、今度は、援軍として前線へ向かう味方の部隊を見て羨望を抱き、英雄的に戦う自らの姿を夢想する。

He wondered what those men had eaten that they could be in such haste to force their way to grim chances of death. As he watched his envy grew until he thought that he wished to change lives with one of them. He would have liked to have used a tremendous force, he said, throw off himself and become a better. Swift pictures of himself, apart, yet in himself, came to him—a blue desperate figure leading lurid charges with one knee forward and a broken blade high—a blue, determined figure standing before a crimson and steel assault, getting calmly killed on a high place before the eyes of all. (pp. 54-55)

が、やがてそうした夢想も消え去り、自分は「臆病な愚か者」だという思いが浮かび (“He now conceded it to be impossible that he should ever become a hero. He was a craven loon.” p. 56), また味方が負けてしまえば逃げ出したことも正当化され、逆に自分の先見の明が証明され、この重荷から解放されるのにと感じたりもする。

In a defeat there would be a roundabout vindication of himself. He thought it would prove, in a manner, that he had fled early because of his superior powers of perception. A serious prophet upon predicting a flood should be the first man to climb a tree. This would demonstrate that he was indeed a seer. (p. 57)

さすがにこうした考えを抱いたあとで、自分はどうしようもない利己的な人間だと自己嫌悪に陥るのだが (“He said that he was the most unutterably selfish man in existence.” p. 57), 感情と思考の起伏, その刻々と変化していく心理の動きのパターンは何ら変わっていない。そしてジ

ム・コンクリンの死の意味など、自身の逃亡をめぐる様々な懸念が千々に乱れるなかでどこかに消え去ってしまい、衝撃的な経験がヘンリーにとっては何ら衝撃的ではありえないという逆説めいた印象のみがひととき強く照らし出されてくるのである。

VI

ヘンリー像について考察する際のもうひとつの重要な視点はウィルソンとの対比である。一日目の戦いまでは、ヘンリーもウィルソンも結局は似た者同志と考えてよく、ウィルソンもヘンリーと同様、内心では臆病に悩まされ、恐怖にふるえていると考えることができる。ただウィルソンの場合、その内面をクレインは描写していないのだが、その臆病さや恐怖が虚勢をはるという形であらわれてくるのである。彼が“the loud soldier”と呼ばれているのもそのことを暗示しているとみてよい。

たとえば、間近に迫った戦いを前に勝利を確信し、澄みきった誇らしげな眼で将来を見つめているウィルソンの姿は、外目にはヘンリーと全く対照的である (“He was sprightly, vigorous, fiery in his belief in success. He looked into the future with clear, proud eye, and he swore with the air of an old soldier.” p. 18)。そしてどんなことがあっても絶対に逃げ出したりはしないとそぶく自信にあふれた彼に、ヘンリーが、「おまえが世界で一番勇敢なわけでもないだろう」 (“You ain't the bravest man in the world, are you?” p. 19) と言うと、彼はひどく腹を立ててしまう。この怒りは子供っぽい若々しさのあらわれではあるが、同時にその言葉がはからずもウィルソンの虚勢の奥に隠された内心の不安や恐怖を刺戟したからにほかならない。その証拠には、実際に戦場に到着し、最初の戦いの轟音をきいたあと、ウィルソンは「青ざめて、少女のような唇をびくびく震わせながら」これが最初で最後の戦いだと言って、ヘンリーに家族への形見の包みを預ける (““It's my first and last battle, old boy”, said the latter, with intense gloom. He was quite pale and his girlish lip was trembling.” p. 26)。そして自分を憐れですすり泣く始末である。ヘンリーは自分だけが臆病者のように感じ孤立感を抱いていたのだが、ここに思いも寄らぬ同類がいたのである。

だが、逃走後ヘンリーが再会したときにはウィルソンはすっかり変貌して

いる。この変貌の理由や経緯をクレインは描きこんではいないが、もちろんこれは主人公はウィルソンではないからであり、クレインとしてはヘンリーとの対比の機能をウィルソンに担わせることができさえすればよいからである。どのような対比が意図されているかについては、お互いに関連する二つの視点があるとみていだろう。ひとつは小説のコンヴェンションのレヴェルの問題であり、もうひとつは性格造型のレヴェルの問題である。

スティーヴン・マイユはリアリスティックな小説の主人公の定型について次のように述べている。

At the opening of a typical realistic war novel, the central character was often vainglorious, and the traditional martial attitudes of romance were sometimes parodied. Surrounded by the brutality of warfare, the “hero” showed himself afraid in battle and only later became brave: he did not come to war with inborn courage but acquired it in the heat of battle.²³

ヘンリーも華々しく英雄的な活躍をする自らの姿を夢想しはするが、決して自らの勇敢さを吹聴したりはしてはず、むしろ最初から不安に怯えている。一方、ウィルソンは、「俺が逃げるといって賭けた奴は、賭け金を損するだけの話さ」(“The man that bets on my running will lose his money, that’s all.” p. 19) と豪語しており、その意味では極めて“vainglorious”であって、ヘンリー以上に、このプロットの定型に合致している。またリアリスティックな戦争小説によって確立されたイニシエーションの物語のパターンをいわば内側から支える、主人公の人間の成長という点からも、ウィルソンがその要件を十分に満たしていることは明らかである。彼は負傷したヘンリーをかがいしく看護し、仲間の兵隊同志で口論がはじまれば進んで仲裁に入る。こうしたウィルソンの、虚勢ではなくて成熟に裏付けられた謙虚さはヘンリーの眼にも明らかである。

The youth took note of a remarkable change in his comrade since those days of camp life upon the river bank. He seemed no

23. Mailloux, p. 50.

more to be continually regarding the proportions of his personal prowess. He was not furious at small words that pricked his conceits. He was no more a loud young soldier. There was about him now a fine reliance. He showed a quiet belief in his purposes and his abilities. And this inward confidence evidently enabled him to be indifferent to little words of other men aimed at him. (p. 69)

つまりウィルソンこそ戦いによってイニシエーションを果たす主人公の典型的人物として設定されているといえよう。

この設定は、すでに指摘した、イニシエーションの物語の枠組を借りておきながら、その内実を突き崩すという仕掛けに側面から照明をあてる働きをしている。ヘンリーもウィルソンも、その外面的なあらわれには違いが見られるにしても、戦いの前までは不安にうち震える平凡な兵士である。それがそれぞれの戦闘体験を経た後、二日目の戦いでは共に軍の先頭に立って華々しい活躍を示す。そして今度は外面的には同じように勇猛果敢な戦いぶりではあっても、内面的なコントラストがあらわれる。ウィルソンの行動が人間としての成長にもとづいた、「自らの目的と能力に対する静かな信頼」に裏付けられているのに対し、ヘンリーの場合にはそのような内実が欠落している。それどころか、ウィルソンに離れ離れになってからのことを質問されて、逃亡や負傷の経緯が露見しそうになれば、ウィルソンから預っていた形見の包みのことをちらつかせようとする。そして弱味を握っていることでウィルソンに対して精神的に優位に立ち、あろうことか自尊心が回復してくるのである。

The friend [i.e. Wilson] had, in a weak hour, spoken with sobs of his own death. He had delivered a melancholy oration previous to his funeral, and had doubtless in the packet of letters, presented various keepsakes to relatives. But he had not died, and thus he had delivered himself into the hands of the youth.

The latter felt immensely superior to his friend, but he inclined to condescension. He adopted toward him an air of patronizing good humor.

His self-pride was now entirely restored. (p. 72)

こうしてクレインは、イニシエーションの物語の典型的人物を片方に配置することによって、同じ枠組を借りているヘンリーの内実の欠如を殊更に強調しているのである。そして同時に、ヘンリーのウィルソンに対する態度は、「戦場の友愛」をも突き崩すことになっており、構築しつつ破壊するクレインの資質はここにも明瞭に顔を覗かせている。

ウィルソンとの対比によるヘンリー像の造型に関しては、ヘンリー・ビンダーがアップルトン版では削除されたマニユスクリプトを視野に入れて、極めて興味深い考察をおこなっている。小論のヘンリー観を補強してくれる論旨なので、あえてここに補足的にとりあげておきたい。ビンダーによれば、マニユスクリプトに施された削除・修正は不徹底なものであり、削除部分と相呼応する箇所がアップルトン版では修正されずにそのまま残存しており、そのため矛盾が生じてきているところがあるという。この基本的な立場から、ビンダーはその矛盾点を洗い出しているのだが、ウィルソンとヘンリーの対比に関しては、Jimmie Rogers という兵士の戦死のしらせに対する両者の反応を比較している。²⁴

14章で、²⁵ 変貌したウィルソンは、ジミー・ロジャーズを含めて同じ部隊の兵士が殴りあいになりそうなのを仲裁に入る。喧嘩になるのをうまく防ぐことはできたが、あとでジミー・ロジャーズと決着をつけねばならなくなったことを彼はヘンリーに告げる。

“Jimmie Rogers ses I’ll have t’ fight him ‘after th’ battle t’-day,” announced the friend as he again seated himself. “He ses he don’t allow no interfeerin’ in his business. I hate t’ see th’ boys fightin’ ‘mong themselves.” (p. 71)

18章でこのジミー・ロジャーズは敵の銃弾に重傷を負う。するとウィルソンは（ロジャーズのために）²⁶ 水を捜しに出かける。

The youth’s friend had a geographical illusion concerning a

24. Binder, pp. 27–28.

25. 原案の第12章を含むマニユスクリプトにもとづいた版では、第15章になる。

26. アップルトン版ではウィルソンが水を汲みに出かける理由は明記されていない。

stream, and he obtained permission to go for some water. Immediately canteens were showered upon him. "Fill mine, will yeh?" "Bring me some, too." He departed, laden. The youth went with his friend, feeling a desire to throw his heated body into the stream, and soaking there, drink quarts. (p. 82)

削除部分から判明するのだが、ウィルソンがロジャーズに対する同情から水汲みに出かけるのに対し、ヘンリーを含めて他の兵士にはそうした動機はないと考えてよい。

この二つの、ジミー・ロジャーズに関連するエピソードに呼応する部分が、マニユスクリプトの最終章には含まれているが、アップルトン版では削除されている。そのために、そのエピソードが宙に浮いた形となり、ウィルソンとヘンリーの対比の明確な意味が曖昧になっているとビンダーは指摘している。その箇所はマニユスクリプトでは次のようになっている。

His friend, too, seemed engaged with some retrospection for he suddenly gestured and said: "Good Lord!"

"What?" asked the youth.

"Good Lord!" repeated his friend. "Yeh know Jimmie Rogers? Well, he—gosh, when he was hurt I started t' git some water fer 'im an' thunder, I aint seen'im from that time 'til this. I clean forgot what I—say, has anybody seen Jimmie Rogers?"

"Seen'im? No! He 's dead," they told him.

His friend swore.

But the youth, regarding his procession of memory, felt gleeful and unregretting, for, in it, his public deeds were paraded in great and shining prominence. (Norton Anthology Edition; pp. 903-904)

ウィルソンが、自分に対して喧嘩を売ってきたロジャーズの死を嘆き、配慮が足りなかったと悔やんでいるのに対し、ヘンリーは自らの戦いぶりを思い出して悦に入っているのである。

VII

ヘンリー成長説は、二日目の戦闘での彼の勇猛果敢な活躍及びそれに対する彼自身の評価を、作品の後半部ではアイロニカルなトーンは消滅しているかあるいは時おり残滓のごとく混入しているにすぎないという前提に立って、そのまま受け入れるところに成立している。たしかにクレインのまなざしがアイロニカルではないと仮定してみると、表面的にはそうした見方を裏付ける箇所がかなりみられる。

まず第一に、昨日とは異なり、ヘンリーは目前に迫っている戦いに不安や恐怖を感じてはいない。昨日の経験を通して自分自身に対する信頼が生まれているのを彼は感ずる。第二に、その自信に力を得て、自軍の将軍たちへの批判をおこなっている。第三に、その日の最初の銃撃戦で味方の兵士に「戦争の鬼」(“a war devil” p. 81)と思われるほどの凄まじい戦いぶりを示す。第四に、自軍の将校がヘンリーの部隊を「らば追い」(“mule drivers” p. 84)と呼ぶのを偶然耳にすることで、目から鱗が落ちたみたいに自分が無意味な存在であることに気づき、その後の二度にわたる突撃でもウィルソンと共に軍の先頭に立って行動する。その勇猛さは大佐から少将に値するとの賞賛を博するほどのものであり、このことを知ってヘンリーは敵を眼前にしても落ち着き払った自信を失わない。

こうした点を文字通りに受け取るならば、ヘンリーが練達の強者のように揺るぎない自信に裏付けられた勇敢な兵士に変貌したと言わざるを得ないだろう。しかし第一と第二の点については、クレインは明らかにヘンリーに対してアイロニカルな態度をとっており、第三と第四の点についても、クレインの描写に無意識の願望ないし感情移入が混入して曖昧さがつきまといはするが、やはり基本的にはアイロニカルなトーンが維持されていると考えてよい。

ヘンリーの自尊心が、ウィルソンの弱味を握ることによって自らの過ちが露見するのを防げるという安心感のなかから甦ってきたように (“His self-pride was now entirely restored. . . . He had performed his mistakes in dark, so he was still a man.” p. 72), 彼の中に芽生えた自信の奥には自己欺瞞が横たわっている。彼が昨日の経験から得た教訓はというと、端的に言えば、過ちを犯しても人に見つかりさえしなければいいというものである (“He had been taught that many obligations of a life were easily

avoided. The lessons of yesterday had been that retribution was a laggard and blind.” p. 73)。彼は自分は「龍」と戦ってきたのだが、思っていたほど恐いものではなかったと考える (“He had been out among the dragons, he said, and he assured himself that they were not so hideous as he had imagined them.” p. 73)。しかしもちろん彼は「龍」の前から逃げ出したのであり、そもそも自信が生まれてきたという思い自体が彼の夢想にすぎず (“He was aroused from this reverie by his friend.” p. 73)、一種の願望の表明なのである。

したがって、彼がどんなに威勢よく將軍たちを批判してみたところで、読者と彼との距離は縮まるどころか、その大言壮語がちょうど昨日までのウィルソンを髭鬚とさせ、苦笑を禁じ得なくなる。そうした気持ちをもてとったかのように、クレインはある兵士に「ひょっとするとおめえ、昨日の戦闘をぜんぶ自分ひとりでやったと思ってるんじゃないかねえのか」(“Mebbe yeh think yeh fit th’ hull battle yestirday, Fleming.” p. 76)と言わせている。するとこの言葉を聞いて、ヘンリーは突然おとなしくなってしまうのである (“The significance of the sarcastic man’s words took from him all loud moods that would make him appear prominent. He became suddenly a modest person.” p. 76)。

二日目の最初の銃撃戦でヘンリーは「戦争の鬼」と化し、我を忘れた状態で、味方が攻撃をやめたあとまでも一人猛然と銃を撃つ。そうした自分の姿をヘンリーは次のようにふりかえる。

These incidents made the youth ponder. It was revealed to him that he had been a barbarian, a beast. He had fought like a pagan who defends his religion. Regarding it, he saw that it was fine, wild, and, in some ways, easy. He had been a tremendous figure, no doubt. By this struggle he had overcome obstacles which he had admitted to be mountains. They had fallen like paper peaks, and he was now what he called a hero. And he had not been aware of the process. He had slept and, awakening, found himself a knight. (p. 81)

J. B. Colvertによれば作品の「転回点」²⁷であるこの一節を読み解く際に、まずこうした思いをヘンリーに喚起させた戦いぶり自体が、昨日の最初の戦いの様子に呼応しているということに注意しておく必要がある。彼は“battle sleep” (p. 32) の状態に陥っているのであって、決して熟練した兵士の冷静な判断力によって戦ったのではない。そして山のごとく思えた障害が紙の山でも崩れるようにいと易々と克服され、ヘンリーは彼謂うところの英雄になる。ここには昨日までヘンリーが悩んでいたものがこんなにも易々と克服されるたぐいの取るに足りない問題であったという含意をみてもいいだろう。その意味でそれまでのヘンリー像を突き崩す点があることは否めない。字面の意味とは異なり、ヘンリーが大きな障害を克服して「恐るべき人物」になるどころか、ヘンリー像自体が逆に矮小化されているのである。

また単なる「英雄」ではなくて、「彼謂うところの」という限定付きの「英雄」である点にも留意しておくべきであろう。そしてそうしたものになるプロセスが意識されていないということは、ヘンリーが“battle sleep”に陥っていたことを現象的には示しているのだろうが、同時に主体的なコミットメント、そのプロセスに付随する人間としての成長を含めた諸々の要因が、実質的には全く脱け落ちていくことも示していると思う。眠っていて、眼が覚めたら騎士になっていたというのである。何とあっけないことか。これをクレイン流のレトリックだとみるにしても、その意味作用はヘンリーの英雄性を浮きたたせる方向に働いているのでは決してないであろう。実にあっけなくヘンリーは自らを「英雄」だと思いこんでしまうのであり、ここではヘンリーのどうにも底の浅い自己幻想が露呈してくるばかりか、「英雄」という概念そのものが突き崩される。そしておそらくは、イニシエーションの物語の枠組やそれを内側から支えている倫理性にまでも、クレインの破壊的アイロニーの射程は及んでいるのである。

そうしたアイロニーの視線に曝されるとき、人間の存在は「取るに足りない」ものでしかあり得ない。この認識がおそらくクレインの世界観もしくは人間観の根底にあると考えてよい。ここにヘンリーに対しては常にアイロニカルなまなざしを向けながら、同時に微妙な共感あるいは感情移入が成立する余地が生じてくるのだと思われる。将校がヘンリーの部隊を指して言った

27. James B. Colvert, “Stephen Crane’s Magic Mountain,” *Stephen Crane: The Red Badge of Courage* (A Norton Critical Edition), p. 305.

「らば追い」という言葉からヘンリーは一種の啓示を得るのだが、それもこうした事情と絡めて理解すべきであると思う。

These happenings had occupied an incredibly short time, yet the youth felt that in them he had been made aged. New eyes were given to him. And the most startling thing was to learn suddenly that he was very insignificant. The officer spoke of the regiment as if he referred to a broom. Some part of the woods needed sweeping, perhaps, and he merely indicated a broom in a tone properly indifferent to its fate. (p. 84)

「すっかり年をとってしまったように感じた」だとか、「新しい眼が与えられた」だとか、いかにもヘンリーの成長を示唆する言葉が並んでいる。おまけにこれに続く突撃の場面でのヘンリーの行動が勇猛果敢であることは否定しようがないときている。しかしここで表明されている認識は、はからずもクレイン自身の人間観もしくは世界観が吐露されているのだと考えた方がよい。後続の場面でのヘンリーの華々しい活躍にしても、すでに触れたように、戦いの熱狂の最中に個我の殻が消滅し何か大きな全体に溶けこみ、そこに友愛や連帯の感覚が生まれることに対するクレイン自身の潜在的願望がその描写に反映されているのだとみることができる。

ヘンリー像の造型という文脈の中にこの一節を置いてみれば、この認識が真の啓示となって、ヘンリーを変化させているとはいえないであろう。ホースフォードが指摘している通り、ヘンリーに「新しい眼」が与えられているのは何もこれが最初ではない。²⁸ 森の中の彷徨の後、すでに第8章でヘンリーは自分自身及び同僚の兵士たちの存在の境位を相対化する契機を一時的に獲得している。

Reflecting, he saw a sort of a humor in the point of view of himself and his fellows during the late encounter. They had taken themselves and the enemy very seriously and had imagined that they were deciding the war. Individuals must have supposed that

28. Horsford, p. 124.

they were cutting the letters of their names deep into everlasting tablets of brass, or enshrining their reputations forever in the hearts of their countrymen, while, as to fact, the affair would appear in printed reports under a meek and immaterial title. But he saw that it was good, else, he said, in battle every one would surely run save forlorn hopes and their ilk. (p. 43)

更に一日目の最初の戦いのあと、ふと空を見上げて驚く場面もある。

As he gazed around him the youth felt a flash of astonishment at the blue, pure sky and the sun gleamings on the trees and fields. It was surprising that Nature had gone tranquilly on with her golden process in the midst of so much devilment. (p. 34)

地上での人間の営みに無関心な自然に対する驚きは人間存在のちっぽけさの認識に通底していくはずである。しかし、すでに縷縷述べてきたように、これらの認識がヘンリーの成長という一点に収束した気配はないのである。そのことについては森の中の経験やジム・コンクリンの死の目撃がヘンリーにどのような深い意義をも持ち得なかったことを想起するだけでよい。この認識にしてもヘンリーの絶えず浮き沈みする思考と感情の鎖のひとつの輪にすぎぬと考えるほかないであろう。²⁹

最終章においても、ヘンリー独特の心理のパターンは実質的には何ら変化していないと言わざるを得ない。戦いが終わり、自分はよくやったという満足感で、全体としては昂揚した状態にあるが、相変わらず威勢がいいかと思

29. その日の二度にわたる突撃の最初の突撃で、ヘンリーは死んだ旗手のかわりに軍旗を死守する。その自らの戦いぶりに誇らしい満足感を抱くのだが、自分が実際に突進した距離が非常に短かったことに彼は愕然とする (“They turned when they arrived at their old position to regard the ground over which they had charged. The youth in this contemplation was smitten with a large astonishment. He discovered that the distances, as compared with the brilliant measurings of his mind, were trivial and ridiculous.” p. 95)。突撃の場面の描写は、すでに指摘したように、昂揚したトーンで、生彩あるものになっているが、その描写を突き崩すかのように、ここでも *ironic deflation* の手法が用いられている。

うと意気消沈し、しょげかえっているかと思うと元気が出てくる。自らの戦いぶりを顧みて、それが燦然と光り輝く武勲であることに誇らしい歓喜を感じるが、やがて逃走とぼろ服の兵士の記憶が甦り、有頂天だった気分もべしゃんこになってしまう。しかし、次第に罪の意識を突き放すことができるようになり、自分の中に静かな成長を感じる (“He felt a quiet manhood, nonassertive but of sturdy and strong blood.” p. 109)。彼は生まれ変わり、一人前の人間となって、血と怒りの国から戻ってきたのだというわけである。そして花がしぼむように古傷も消えて、彼は同僚の兵士たちと撤退して行くのだが、折りしも垂れこめた雨雲の中から一筋の金色の太陽の光が射してくる。

ここでもテキストの表層を一皮めくれば、アイロニーの意味層が露出してくる。ヘンリーは生まれ変わって成長したと感じているが、逃走し、ぼろ服の兵士を見捨てたという自らの行為には何の決着もついていない。罪を距離をおいてみるができるようになったとはいっても (“gradually he mustered force to put the sin at a distance.” p. 109)、それは罪が解決され、解消されたということの意味しているのではないであろう。華々しかったのはあくまでも人の眼に見えるところでの行為 (“public deeds” p. 107) であり、しかもその武勇の映像はうわべだけ華やかな (“gilded” p. 107) ものである。そしてヘンリーが逃亡とぼろ服の兵士の記憶に苦悶の叫びをあげるのは、自らの過ちに対するやましさと後悔のせいとは断定できず、むしろそれが露見しはせぬかという不安のせいであると考えられる。だからこそ彼は盗みみるように仲間の兵士たちの方をみるのである (“He looked stealthily at his companions, feeling sure that they must discern in his face evidences of this pursuit.” p. 108)。ヘンリーの自信が甦り、「静かな成長」が感じとられるような本質的契機は何ら示されてはいない。ヘンリー自身がそう感じたことに偽りはないとしても、そこには知らず知らず自己欺瞞が入りこんでいるのであり、それに気づいていない点で最後まで彼には自己認識が欠如しているのである。仮にクレインがヘンリーの成長を描いたのだとすれば、それは自己認識の伴わぬ成長を描いたのであり、そこでは成長という概念も自己認識という概念も無化されてしまうことになるだろう。

したがって結末の有名な太陽の光にしても、それが希望の色彩を帯びていると断言する根拠はない。ヘンリーの眼に映る自然は、その時々彼の心理状態によって様々に異った相貌を示す。クレインが、金色の太陽の光という

ものにみられる常套的な含意を逆手にとったのだと考えてもすこしも不自然ではない。読者は、たとえば『マギー』の結末の場面で、長屋の部屋の窓から射し込んできた太陽の光をここで思い出してみてもよいだろう。その光が照らし出したのは、マギーの死を嘆き悲しむ母親 Mary はじめ隣人たちの偽善的な茶番劇であった。³⁰

VIII

こうしてみると、最終章も、そこにヘンリーの成長を示唆するような言葉が散見するものの、それらもすべてアイロニーを帯びており、結局は揺れ動くヘンリーの心理の振幅の一局面を反映しているにすぎず、したがって更なる変化の可能性を秘め、非完結的であるといえよう。これはある意味でクレインの精神の動きを反映しているように思う。アイロニーそれ自体は思想というよりも、思想の手段というべきであろう。しかし『赤い武勲章』においては、アイロニー自体が自己目的化しているという印象を受ける。そのアイロニーの戦略についてはこれまでこと細かに述べてきた通りである。ヘンリーの揺れ動く心理を相互にネガティヴに対比し、またイニシエーションの物語の枠組を構築しつつ同時にその内実を突き崩すことで、クレインはアイロニーの乱反射する世界を築きあげた。そこでは築きあげては破壊するというクレインの資質的な志向が存在しており、人物像も文学的コンヴェンションもまたそれを支える倫理性もひとしく deflate されていく。したがってそうしたアイロニーの自己運動の果てに何らかの最終的なヴィジョンがあらわれてくるというよりも、むしろあらゆるものを覆さずにはおかないような、クレインという作家の精神の動きこそが強く感じとられるのである。ここでは、最終的なヴィジョンというようなものは求めず、ひとまず作家のアイロニーの動きそのものを確認するにとどめておきたい。何といっても、クレインは若い作家であり、非完結性のとらえ難さを漂わせているのである。

30. “The inevitable sunlight came streaming in at the windows and shed a ghastly cheerfulness upon the faded hues of the room.” Crane, *Maggie*, p. 57. ついでながら、母親の名前にもまた隣人という言葉にもキリスト教的な含意がアイロニカルにこめてある。